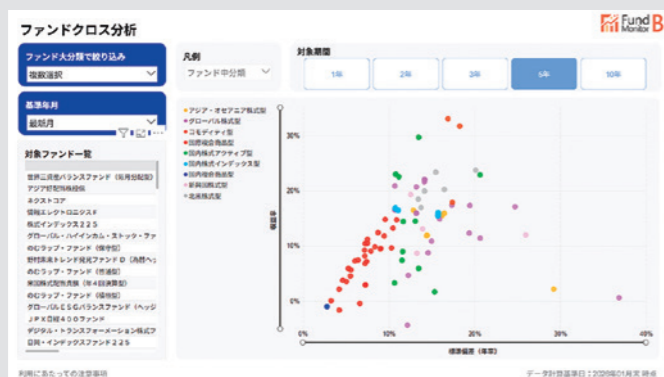
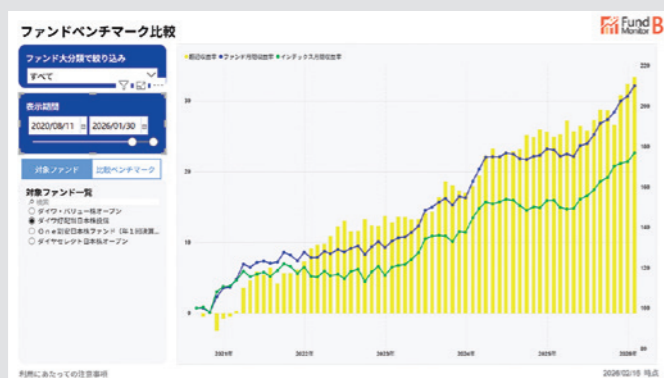




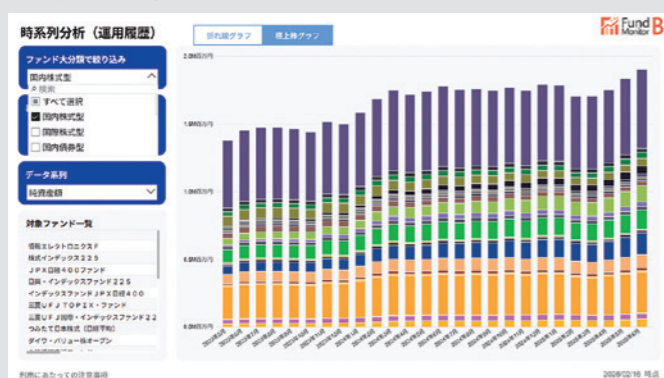
図表2 リスク×リターン横断比較



図表3 ベンチマーク対比で見る運用力の検証



図表4 純資産の時系列推移



出所：NTTデータ・エービック

信会社ごとにデータの取得基準が異なる問題も生じていた。Fund Monitor BIでは同一基準で全ファンドを横断比較でき、月初3営業日にはデータ更新が完了する即時性も確保されている(図表2)。

ビジュアル化機能も実務に直結している。生井澤氏はその具体的な活用シーンを描く。

「例えば、月次騰落率の5年間のデータを棒グラフにするだけで、ベンチマークに対してどの期間にオーバーパフォーマンスし、どの期間にアンダーパフォーマンスしていたかが一目でわかります。金利上昇局面ではこのファンドは強い、株式市場の調整局面ではこの程度の下落になる、といった特性が定量データとして見えてくる。グロースかバリューかを明示していないファンドでも、時系列の動きを観察することで運用傾向が浮かび上がってきます(図表3)」

さらに、同ツールでは独自の「評価ベンチマーク」を設定することで、投信会社がベンチマークを公表していないアクティブファンドについても比較分析が可能だ。アルファやベータの算出がExcel作業なしに実現できる点は、分析の精度と効率を同時に高める。

また、通常の標準偏差によるリスク指標に加え、下方リスク・元本割れ頻度・最大下落率といった指標も備えている。顧客が本当に気にしているのは「どのくらいブレるか」ではなく「どのくらい下がるか」であることを考えれば、これらの指標はまさに顧客視点のリスク評価を可能にするものだ。

「数字だけのExcel表を眺めても、なかなかファンドの全体像は見えません。様々な切り口でグラフ化することで初めて見えてくるものがある。本部の方が既存ファンドをモニタリングする際も、新規採用ファンドを検討する際も、データをビジュアルとして把握できれば、もう一段レベルの高い判断ができると考えています(図表4)」(生井澤氏)

さらに、特性の把握はラインアップ整理にも直結する。同じような名称で実際の値動きもほぼ同一のファンドが並んでいるケース、逆に似たアプローチを謳いながらリスク水準に大きな差があるケースも珍しくない。定量データで特性を可視化することで、「このファンドは整理できる」「このファンドは差別化されている」という根拠ある判断が可能になる。

**定量分析を本部で止めない  
営業店への「翻訳」がカギ**

このように、Fund Monitor BIは本部の高度な分析を強力にサポートするが、その効果は本部内にとどまらない。セールスの「質」を高めるカギは、まさにこの定量分析の現場への「翻訳」にある。本部が高度な定量分析を行っても、その知見が営業店の販売現場に届かなければ意義は半減する。生井澤氏はこの点を、定量分析の最大の課題の1つと位置づける。

「定量分析という、本部の専門家の作業で終わらせてしまいがちです。でもそれはもったいない。本部の分析を営業店向けに噛み砕いて共有してこそ、情報は活用されたことになります。『この数字が何点だから』というような伝え方では営業店には刺さらない。特性という言葉に置き換えて、具体的な商品説明に落とし込む必要があります」

中村氏はさらに「販売前からフォローを設計する」という発想の転換を訴える。

「よくある問題は、ファンドが下落した後に急いでレポートを届けても意味がないということです。5%ルールに基づく臨時レポートも、実際に届くのは下落から2~3日後。現場レベルでは正直、役に立ちにくいでしょう。大事なのは、販売時に『このファンドはこういう

局面で下がる可能性がある』という定量的な根拠を示しておくこと。そうすれば、下落局面が来たときに、『ご説明した通りの動きです』という対話がお客様とできるようになるのです」

バランスファンドを例に取れば、「安定的に収益が見込める商品」という抽象的な説明だけでは、下落局面になった瞬間に信頼を損なってしまう。しかし最大下落率や下方リスクのデータを事前に示し、「過去にはこの程度下落したが、中長期ではこのような回復をした」という定量的な説明をしておけば、市場が急変したときにも顧客との関係を維持しやすくなる。

「リスクという言葉に対して、顧客が心配しているのは下ブレです。下方リスクや最大下落率を事前に明示しておくことが、本当の意味での顧客理解を深める。フォローがきちりできれば継続保有につながり、顧客満足度の向上に直結します」(中村氏)

Fund Monitor BIは現在、主として

**Fund Monitor®**  
自社の課題や体制に合わせて選べる「Fund Monitor」  
3つのサービス

① **Fund Monitor BI**  
(投信評価分析サービス)



Power BI Desktop\*による分析機能を提供するクラウド型のツール  
時系列での特性把握や複数ファンドの比較など、高度で多面的なビジュアル分析をワンストップで実現したい本部向け

\*「Power BI」は、Microsoft社が提供するビジネスインテリジェンスツールです。

② **Fund Monitor RP**  
(投信評価レポートサービス)



月次ベースでファンドごとの投信評価レポートPDFを提供するサービス  
手軽に定点観測を行いたい場合や、BIを用いた本格的な分析を導入する前の第一歩に適している

③ **Fund Monitor DF**  
(投信データ提供サービス)



国内公募投信の評価データを定型レイアウトのCSVで提供  
自社システムとの連携や、独自のデータ加工・分析を行いたい担当者向け

本部向けの支援システムとして位置づけられている。本部が分析・咀嚼した内容を営業店に展開するための素材を作る場として活用するという発想だ。本部が蓄積した定量データを「翻訳」して現場に届けること。それが、定量分析を業務全体の中で「生きた情報」にするための回路となる。

定量評価の限界が指摘されることは少なくない。しかし問題の多くは、データそのものではなく、その使い方にある。単体・定点での判断ではなく、時系列で特性を把握し、投資環境との関係を踏まえて見ること。本部で分析を完結させず、営業店へ翻訳すること。そうしてはじめて、定量データは実務の中で力を持つ。Fund Monitorは、その基盤を支えるツールの1つと言えるだろう。同サービスは、本記事で紹介した高度な分析ツール「BI」のほか、手軽なレポート形式の「RP」、データ連携用の「DF」と、自社の課題や体制に合わせて最適な形式を選ぶことができる。



**NTT DATA**  
株式会社NTTデータ・エービック

株式会社NTTデータ・エービック  
TEL : 03-6435-5980  
https://www.nttdata.abic.co.jp/

動画で見る  
Fund Monitor BIの画面と  
分析イメージ

